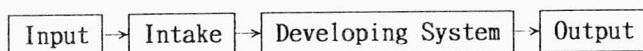


1. はじめに: 日本人大学生に見られるreading能力とwriting能力の乖離

第二言語あるいは外国語の習得における「インプット」の重要性は、Krashenの“Input Hypothesis”以来、色々とモデル化されてきたが、VanPatten et alは下記のようなモデルでインプットの働きを説明している。(1)



学習者は、耳や目などを通じてインプットされた第二言語あるいは外国語の中から、難易度や興味・関心などの面で自分に適合した吸収可能部分(Krashenは“Comprehensible Input”と表現)のみを「摂取」するが、これを自己の言語システムの中うまく組み込み育成することに成功すれば、理論的には上図のように、当該の言語で何らかのアウトプットを生み出すことができるようになる。しかし、実際には、こうしたプロセスの円滑な進行を阻む諸要因が働く。このモデルに日本人大学生を当てはめ、インプットを彼らのreading経験、アウトプットを彼らのwriting能力と考えてみた場合、「成人としての国際コミュニケーションを行うのに必要な“expository writing”能力(論理的、解説的、評論的な文章の作成能力)の育成」といった観点から見る限り、上記の一連のプロセスには種々の阻害要因が働き、十分なアウトプット能力を育てるには至っていないことが多い。

中学から大学まで、10年間近くもreading中心のインプットを受け、かなり難解な評論を読みこなすようになったはずの大学2、3年生約20名に自分のreading能力とwriting能力を自己評価するアンケートを実施してみたが、大半の回答者は「自分のreading能力はnative speakerの中高生なみであろうが、writing能力はnative speakerの小学生低学年レベルではないか」と答えた。次の(作文実例1)は大学1年生が書いた自己紹介文である。(作文実例1)は、宿題ではなく授業時間中に大学生にこうした英作文課題を与え「即興で」書かせた場合にアウトプットされるものとしては、特にレベルの低いものではなく、ごく典型的なレベルのものと思われるので、アンケートでのwriting能力自己評価は、残念ながら、「謙遜」や「過小評価」ではなく、かなり適切なものと言えよう。

(作文実例1)“My name is Taro Yamada. I'll be twenty this June. My hometown is Sapporo City in Hokkaido. There are a lot of beautiful places, but we have a very cold winter. I have parents and one sister. They are in Hokkaido. My hobby is travel. I want to go to Fukuoka.”

Cumminsは言語能力を、日常的な個人間コミュニケーションのためのBICS(Basic Interpersonal Communication Skill)と学問や知的作業を処理するためのCALP(Cognitive Academic Language Proficiency)に二分した。成人としてのwriting能力として求められるのは当然、後者のレベルのもの、特に分析的、論理的なexpository writingの能力で

あろう。native speakerの大学生向けのwriting参考書では、論文・評論・レポートなどのexpository writingのチェック事項として、次のような諸点があげられている。

- ①冒頭部分ではreaderの注意を喚起するための"attention-getting device"がうまく使われているか。
- ②文中に全体の論旨を明確に示す"thesis statement"が盛り込まれているか。
- ③各パラグラフにはそのパラグラフのトピックを示すトピック・センテンスがあるか。
- ④各パラグラフのトピック・センテンスをサポートあるいは説明するだけの十分な詳細情報が各パラグラフに盛り込まれているか。
- ⑤終結部分(conclusion)は前出の"thesis statement"をうまく反映しているか。
- ⑥単文、重文、複文がバラエティに富んで盛り込まれているか。
- ⑦文章の始まりや修飾方法、文章の長さなどにも適当なバラエティがあるか。
- ⑧メイン・アイデアは主節に、その裏付けとなるサポーティング・アイデアは従属節に記されているか。
- ⑨曖昧な修飾や不適切な箇所にかかる"dangling modifier"はないか。
- ⑩比較対照、分類、例証、因果関係の明示などの論の展開は適切に行われているのか。
- ⑪適切なつなぎの言葉や表現(transitional device)が用いられているか。
- ⑫全体を通じて論理や時制は一貫性を保っているか。

上記のような規準を満たしていることがexpository writingのCALP能力であるとするなら、(作文事例1)はnative speakerの目には、極めて「稚拙な」writingと映るはずである。従って、大学生が社会人になってからビジネスや研究などの分野でnative speakerと互角なwritten communicationを行えるよう準備するためには、大学の英語クラスで、通常行われているようなreading活動に加えて、上記のような標準的なexpository writingのポイントをより明確に示したreading教材、すなわち、学生が将来書くexpository writingのモデルとなるようなreading教材をインプットとして与え、インテイク、アウトプット(writing)の方向により効率的につながるような指導を展開することが重要と考える。

2. reading経験がwriting能力育成に効果的につながらない主因

当然のことながら、reading指導はwriting能力の育成を直接的あるいは間接的に目指したものと限らない。特に、大学の英語クラスでは、「文学作品を鑑賞する」、「評論の内容を理解する」、「学術論文を読み情報を得る」といったreading自体が目的であることも多いし、概略を把握する"scanning"や必要情報を抽出する"skimming"、あるいは、文脈から意味を推察する"guessing"など、readingのための"strategies"を学習することが目的の場合もあろう。また、英語を日本語に訳出することが主目的となる場合もあろう。しかし、いずれの場合も、reading活動はただテキストを正確に受け止めるだけの単純な受動的プロセスではなく、readerとテキストの間の複雑な相互作用プロセスであることが解明されている。

Grabe(2)は、readerは、readingのプロセスでは、下記の6つの技能や知識、戦略を同時に働かせることになると分析している。

- ①Auto Recognition Skill(テキストに書かれている字句や情報を自動的に処理する技能)
- ②Vocabulary and Structure Knowledge
- ③Formal Discourse Structure Knowledge(前出のチェック事項に出て来たようなパラグラフ構成などを中心としたフォーム面の知識)
- ④Content/World Background Knowledge(専門分野や文化的な背景知識)
- ⑤Synthesis and Evaluation Skills/Strategies(読み進んできたことをまとめたり評価したりする技能/戦略)
- ⑥Metacognitive Knowledge and Skills/Strategies(認識力/戦略)

読解だけでもこれだけの同時処理力を必要とする訳であるから、適切な日本語訳を探求する訳読となると、readerの情報処理面での負担はさらに高まる。しかし、人間の情報処理能力は限定的なものであるから、内容の理解と英語のフォーム自体の記憶を同時に進めることはなかなか困難である。VanPatten(3)は、単純な内容の短い文章を用いて、各文の内容と動詞の語尾変化などの単純なフォームを同時に記憶させる実験を行ったが、双方単純であっても同時処理はなかなか難しく、内容とフォームの記憶の間でトレード・オフが生じる結果となった。ましてや、複雑な思考を要する長い論説や評論文の場合には、読解に加えて、そこに登場した英語表現や構文、パラグラフ構成、論の展開法などまでも確実にインテイクし記憶にととめるなどといった過大な情報処理作業を学生に期待するのは極めて難しい。

Krashenは、学習者が吸収可能なインプットを“Comprehensible Input”と呼び、writing能力の育成の鍵は、あくまでも学習者自身が“voluntary reading”(自発的な読書)から十分な“Comprehensible Input”を“subconsciously”に得ることであり、教室での指導は補助的な役割しか果たさないとしている。英語が生活や勉学の日常語であるESL(English as a Second Language)環境では十分な自発的な読書によりwriting能力の育成が自然と育まれる可能性があるかも知れないが、英語が日常語ではなく外国語(EFL: English as a Foreign Language)である日本の大学では、それ程の量の自発的なreadingが行われるのを期待することは難しい。また、上記のような情報処理能力面のリミットから考えても、通常のreading活動からexpository writing能力の育成につながるようなフォーム面でのインテイクが十分に行われるのを期待することも難しい。従って、通常のreading活動以外に、教師がexpository writingのポイントを端的に示す適切なreading教材を特に選び、学生にこれを意識的にインプット、インテイクするよう促す努力が必要である。また、EFL環境では、英語のアウトプットのチャンスは現実には、試験の解答用紙に短文を書くことと黒板に宿題の和文英訳の答えを書くことしかないといった場合も多々あろうが、これではせっかく意識的なreadingを通じてインプットしたexpository writingのポイントを活用するチャンスが全くないことになる。教師はここでも学生が学習したexpository writingの表現方法をできるだけ活用し、いくつかのパラグラフで自分の考えを論理的に書くことができるようなアウトプットの場を意識的に与える必要がある。すなわち、expository writing能力の向上を目指して、reading活動とwriting活動を意識的に統合、指導していくことが必要と思われる。

3. writingのためのインプットとして適当な教材例

では、writing能力の育成にできるだけ効果的につながるreading教材としては実際にどのようなものがあるのか考えてみたい。社会人となって求められる英語のexpository writingには数百ページに渡る論文や報告書なども稀にはあるかも知れないが、一般に必要なのは1~数ページ程度のレポートやレター、メモなどを作成する能力であろう。こうした現実のニーズを念頭に置いた場合、インプットされる各々のreading教材も、長編の評論文ではなく、比較的短いものが適切と思われる。長編の評論文では、内容的に充実したreading体験が得られるかも知れないが、数パラグラフ、数百語の小文で明白なパラグラフ・ベースのレトリカル・パターンがはっきりせず、インプットされても、expository writingの典型的フォームがインテイクされずに終わってしまう可能性も高い。

スタイルの面では、大学生は、expository writingについては全く初心者であるから、クリエイティブな英文を書くことより、あくまでも前出のチェックリストにあったような標準的な英文を書くことにまずは主眼を置いた指導が適切と思われる。しかし、professional writerが書いた評論文や解説文の中には、プロとしてクリエイティビティを重視しているため標準的な英語表現やレトリック・パターンからは乖離しておりwritingのためのモデル教材としてはあまり適当ではないものもある。BraddockはThe New YorkerやThe Atlanticなどに掲載されたprofessional writerのexpository writingを分析し、writingの教科書で教えられているような標準的トピック・センテンスはあまり多く見られなかったとしている。(4)これらは「名文」であるかも知れないが、標準的なexpository writingを知るモデルとしてのインプットとしては決して効率的なものではない。

また、内容も極めて重要である。Krashenは“Input Hypothesis”の中で、“Comprehensible Input”として学習者が吸収するのは、学習者自身が自発的に興味を持てるものだけであるとしているが、writing能力の育成を第一の目標としたreading教材も、学生が十分興味を持っていないようなものでは、インテイク、アウトプットの段階までつながらずに終わってしまうことになる。

以上3つの条件をすべて兼ね備えたreading教材を見つけるのは難しいが、これらの諸条件をある程度満たしているいくつかのreading教材を併用すれば、かなりの程度効果的なインプットを実現することができよう。本稿では、こうしたモデル教材の実例として次の3種を提言したい。

(1)米国標準テストのreadingセクション:昨今の留学ブームを反映して、SAT、GMAT、GREなどの米国の各種標準テストの“Official Guide”や問題集が日本でも容易に手に入るようになったが、そのreadingセクションは極めて標準的なexpository writingの文章で構成されている。標準テストという性格上、設問に対して複数の答えが出るのを防ぐため、意味の曖昧さをできるだけ排除することを目指して文章が作成されているため、誤解を最小限にとどめるexpository writingのモデルとしては極めて適切である。内容的にも、米国の社会や歴史などに関するものが多く、日本人大学生が興味を持って読める。下記の(教材実例1)に示したのはGMAT(経営大学院志願者用標準テスト)readingセクションの1つの最初の部分であるが、各パラグラフがトピック・センテンス(下線部分)を冠した標準的な構成であるだけでなく、“individual withdrawal”/“vision quest”という2つの儀式をめぐる比較対照論法など、数パラグラフにまたがる論の展開法も学べる。また、米国人大学生の標準的な語彙レベルも分かる。量的には500語程度とやや長いので、上級レベルの学生向きと言えよう。

(教材実例 1)

~~Almost all native North American cultures were strongly bound to their spirit world. Established proper relations with the supernatural power or beings who were believed to influence, if they did not determine, human actions, was a major and continuing concern of these cultures. Members of hunting cultures often sought such relationship through individual withdrawal to a remote place in an attempt to lessen possible harm from the supernatural force that pervaded the universe usually occurred at times of biological crisis, as at birth, puberty, or the death of relatives, when those affected were thought to be particularly subject to such force.~~

(以下中略)

~~Vision quest to tap the spiritual power in the universe were another means of acknowledging the reality of the supernatural. An individual, usually one approaching adulthood, made a solitary quest in some distant natural place, seeking to contact the supernatural force and obtain from it some element of its power.~~ (以下略)

(2)週刊誌の短文記事:英米の週刊誌の短文記事の中には比較的標準的なレトリカル・パターンに従いながら、professional writerのクリエイティビティも垣間見ることが出来るものが多い。特に、US News & World Reportの最初の数ページの短文記事は簡潔で分かりやすく、レトリカル・パターン、英語表現双方のインプットとして好適なものが多い。(教材実例2)では、冒頭下線部分を"attention-getting device"などの指導に利用することもできよう。最新情報を得たり新語をインプットできるといった利点もある。

(教材実例2)

Typically, working women earn less than men for comparable work, hit glass ceilings and are more likely than men to be sexually harassed. But a new report says women are less likely than men to lose their jobs during recessions. In three of the five downturns since 1969, the number of working women rose while male employment fell, says an analysis in the latest issue of the Department of Labor's Monthly Review.

Why? Men work disproportionately in industries like construction that are affected by economic cycles; the highest concentration of women is in more stable service and government sectors. (以下略)

(U.S. News and World Report, August 16, 1993)

(3)paragraph reading/writingの教科書:最近では、日本でもセンテンス・レベルを越えたparagraph readingやparagraph writingの教科書が随分登場してきている。こうした教科書の利点は、標準的なパラグラフ構成を示すだけでなく、僅かな量のreading教材の中に有用なtransitional device やその他の英語表現が詰め込まれていることである。次に示す教科書の1例は、手順・順序を示すパラグラフであるが、手順・順序を表現するのに便利なtransitional deviceや時制などのモデルが下線部分を始めとする箇所に施されている。ただし、この種の教科書の場合、単一パラグラフのものが多く、(教材実例1)で見られたような複数パラグラフにまたがる論の展開などがインプットできないことも多い。また、内容的にやや単調で、学生の関心を喚起するのが難しいものもある。

(教材実例3)

① Changing flat tire is really not very complicated process. When you have removed the hub from the wheel which has the flat, the jack should be correctly placed so as to be able to lift the car off the ground. (中略) Now you are ready to put the nuts back on the wheel (中略) All that remains is to replace the hubcap, lower the car, and be on your way.

② In order to find a suitable apartment, you must follow a very systematic approach. First, you must decide which neighborhood would be most convenient for you. Then you must determine how much rent your budget will allow. (中略) After you have telephoned the apartments (以下略)

(朝日出版社『パラグラフの読解と構成』)

上記3種の教材はそれぞれ補完的な性質を持っているから、適当に組み合わせて授業でインプットしていくのが望ましい。ただし、人間の情報処理能力の限界を考えると、インプットも、意味内容中心の第1段階とフォーム中心の第2段階に分けて行った方がより効果的と思われる。例えば、(教材実例3)では、まず、第1段階として、注目すべき語句や表現の解説などを交えながら、「タイヤの交換法」、「アパートの選び方」を読解あるいは訳読する。続いて、第2段階として、各パラグラフがトピック・センテンスを冠した構成になっていること、また、手順についての説明を円滑にするためにFirst, Secondといったtransitional deviceや現在完了時制、「All that remains」などの表現が使われていること等をインプットすること

ができよう。

実際のクラスでは、(教材実例3)をインプット後、“All that remains”など、その中で特に学生にインテイクして欲しいいくつかの英語表現については「あとは部屋の掃除をして客が来るのを待つだけだ」とか「あとは仕上げをするだけだ」などのバリエーションを和文英訳という形で学生に課し、まず、センテンス・レベルでのアウトプットを経験させた。続いて、“How to ~”という題目で、「いくつかの段階を踏んで行う仕事や事柄を、(教材実例3)で学んだパラグラフ構成、接続詞、副詞、時制、表現などをできるだけ参考にして、英語で説明せよ(200語程度)」といった指示を付した課題を宿題として学生に与えた。学生にはこのアウトプットを添削、返却すると共に、クラスメートの前で読んで発表し、フィードバックを得る機会も与えた。

4. おわりに:インプットからもたらされたwriting能力の「向上」

下記の2例は上記の課題“How to ~”に対して書かれたものであるが、下線部分に指示に従ってモデル教材(ならびにクラスで提示した関連表現)を活用してアウトプットに努めた努力の跡が見られる。

(作文実例2) Travels can set us free from our complicated daily life. But many people consider "travel" as "prearranged and inclusive tour," where all travelers have to do is to follow a guide's flag. Yet, if you try to plan a travel by yourself, you would have a much better one.

Firstly, you have to decide where to go and what to do there. The grades of hotels you are going to stay are one of the factors which you have to decide. And then you check the means of transportation to get your destinations with timetables. (中略) What is left for you is to set out the journey itself.

(作文実例3) You may think that you can't possibly make butter all by yourself. But in fact, it is very easy. First, you must buy a pair of red boots and an umbrella. After you have pulled on the boots and had the umbrella with you, you must walk into the forest. When you have found an open space in the forest, you are ready to wait till some tiger appear. Tigers should run around you so fast that they melt into butter. Now you have much more butter than you can bring home at a time. (以下略)

こうしたcontrolled compositionの結果出てきたものは「単なる表面的な模倣による一時的な”performance”で、しっかりとインテイクされ自らの言語システムに組み込まれた”competence”ではない」という議論もあろうが、EFL環境においては、冒頭で示したような単純なモデルではなく、適切なインプット(内容、フォームの2段階)→不安定な疑似的”インテイク”→インプットの模倣による人為的な”アウトプット”→教師やクラスメートからのフィードバックといった段階を通じて、学生がよりしっかりとしたインテイクを実現し、本物のwriting能力の育成につなげていけるようにすることを目指す必要がある。

(参考文献)

- (1) VanPatten, B., Cadierno, T. (1993) Explicit Instruction and Input Processing, *Studies in Second Language Acquisition (SSLA)* 15, 225-243
- (2) Grabe, W. (1991) Current Developments in Second Language Reading Research, *TESOL Quarterly* Vol. 25 No. 3
- (3) VanPatten, B. (1990) Attending to Form and Content in the Input, *SSLA* 12, 287-301
- (4) Braddock, R. The Frequency and Placement of Topic Sentences in Expository Prose (Teaching the Sentence and Paragraph for Exposition--San Francisco State University English 704 Course Textbook--掲載)